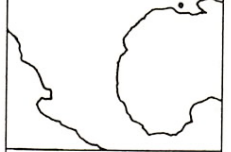


HOUSTON



HOUSTON  
全米第二位の「文化的」な町  
齋藤成也

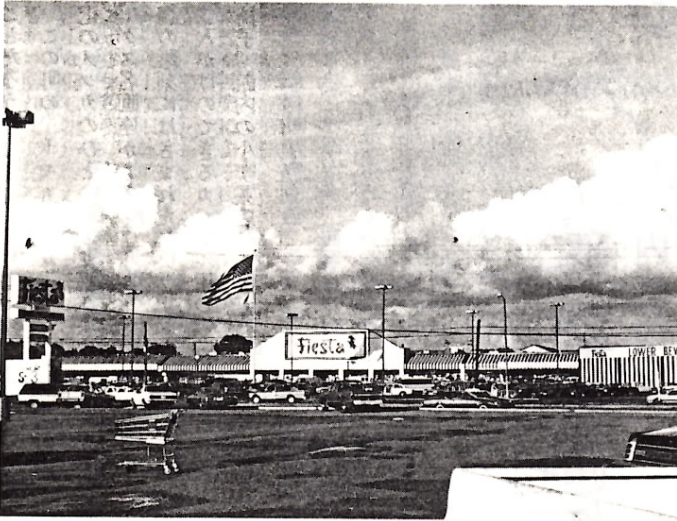
スペース・シャトルはヒューストンから飛びたつと信じこんでいる人が時々いるようだが、それよりもっと驚くことは、あそこは砂漠のどまん中なんだろう、と言われることだ。

僕が初めてヒューストンを飛行機の窓からながめた時は、街はほとんど存在せず、木々の間に家がチラホラみえる程度で、一面、緑一色だった。そしてようやくダウンタウンの高層ビル群と、その南方にアストロドームらしき巨大な円形構造物が見えてきて、ほっとしたことを覚えている。

ヒューストンのもうひとつの高層ビル群は、テキサス医療センターで、ここの病院は、表示がすべて英語とスペイン語の両方で書かれている。つまりヒスパニック系住民が多いこ

とを物語っているのだが、この人口二百万の田舎町は、他にも中国人、

ヴェトナム人、韓国人、及び少数(約三千人)の日本人、それにもちろん



ヒスパニック系のスーパー「フィエスタ」は実に活気にみちている

黒人たちにぎわっている。

最近、こうしたマイノリティー人種に焦点を合わせた、その名もフィエスタ(スペイン語で「祭」の意)というスーパーマーケット・チェーンが、この町のあちこちにできて、セーフウェイやクローガーといった大手のスーパー店がアメリカ的清潔さで冷えびえとしていたのに対して、フィエスタの方はうすぎたなくは

あるが実に活気にみちている。

太っちょのメキシコ人のおばちゃん、目のくりくりした女の子を手押し車に乗せて人波を押しわけ、若いインド人の夫婦が、真剣な目つきで少しでも良いオレンジをと、一つ一ついいいに選んでいたりする。最近は何段の安さにひかれたのか、白人客の姿もちらほら見えるようになった。おやっ? トロロイモだ! 泥のついた大きなやつが、ブリキのバケツに何本か無造作に放りこまれている。一ポンド四ドル。けっこう高い。僕は妻と相談して小さめのイモを選びレジに運んだ。レジの女の子はラテン系が圧倒的に多い。彼女はトロロイモを不思議そうに見る。価格表をひっくり返すのだが、名前がわからないため困っているようだ。そのうちに、めんどろになったのか、まちがえたのか、「ダイコン」とタイプしてしまった。大根は一ポンド一ドル三十セントだから、もうかってしまった。

レジを出ると、テレビのまわりに

人だかりができています。ここもまたほとんどラテン系の男たちだった。サッカーのワールドカップの中継だったのだ。メキシコシティのサッカー熱がそのままヒューストンにまで持ちこまれていたらしい。

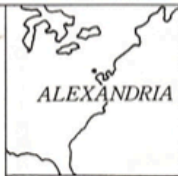
AIDS患者数の全米一位・二位はニューヨークとサンフランシスコだが、二位はヒューストンだという。この人数は同性愛者人口に比例するのだそうだが、するところもけっこう文化的な町なのかもしれない。

自然食品の店をひやかしに行つた。生シイタケなんか置いてあつておもしろいのだが、それよりも、客の過半数が男性のカップルなのである。数種類の豆を大量に買いこむおにいさんや玄米やタキ茶といった日本からの輸入品を買い物かごにほうちこむ男たちであふれていた。

昨年、女性市長キャシー・ウィットマイヤーが提出した、市の職員採用におけるホモ差別撤廃法案は、市民投票で否決されてしまったが、保守的なテキサスにうちこまれたヒューストンという都会のくさびは、これからも少しづつ風土を変えていく

ことだろう。

この町の、ホモも含めた異端者文化のメッカのひとつに、リヴァーオークス名画座がある。アール・デコ調の彫刻にはさまれたスクリーン。二人がけのできるカッパル用の幅広椅子。館内の小喫茶店。こうした小道具もエグイのだが、観客たちのファッションをながめているのもおもしろい。作品の選択もなかなかよく、日本の映画もけっこう来る。『七人の侍』の時は、はじめて見る



馬車も通れば電車も通る  
ALEXANDRIA  
内藤幸雄

私の住んでいる、エル・ディケラーの町は、アレキサンドリア市の西の端の郊外にあるが、つい数年前までは灰褐色の土漠がむき出しになっていた所で、今も砂塵の舞う荒地である。特に春先に訪れるハムシーン(砂嵐)に見舞われたあとは、たちまちにして索莫とした砂の町に化してしまふ。

というような人や年配者が多いせいか館内は静かだったが、『スターウォーズ』にヒントを与えたと言われる『隠し砦の三悪人』が上映された時には、若いファンが多数つめかけ、クロサワやミノネの名前がタイトルに出てくると、大きな拍手や歓声がわきおこった。

アメリカ人は映画に対する反応がだいたい大げさなのだが、トリーキング・ヘッズのステージを撮った『ストップ・メイキング・センス』をみ

た時のことである。上映開始が土曜日の午前0時というのも刺激的だが、映写機がまわり出すと観客の一部がスクリーンの前に出てきて、画面にあわせて踊りだしたのだ。なかにはボウタイをつけた切符もぎりのおにいさんも混じっている。そのうちに、通路を走り回る者、でんぐり返りをする者もでてきた。ヒューストンの夜はこうして更けてゆくのだった。

(さいとう・なるや 自然人類学研究者)

この一帯が脚光を浴びるようになったのは、この荒地地帯に一貫製鉄所の建設が計画されてからである。日本・エジプト両政府間の肝煎りによる合弁会社が設立され、小さな田舎町が砂漠に向って拡がったのである。その建設と操業に携わる日本人の数は、今家族も含めると五百人近くになっている。

電気炉が稼働し、棒鋼工場が生産運転を始め、愈々十一月末から十二月にかけて、還元鉄工場が始動する。その時にはムバラク大統領を始めとした政府高官の参列が予定され、日本からも多数の関係者が訪れて来る。日本ブームとは行かないまでも、今この国で日本が目立ちつつあることは事実である。